

🕒
中学校

社会科のしおり

2026年度
後期号



◆ 世界地図歩き
ニュージーランドを訪ねて 帝国書院・2

◆ 社会科授業のつくり方～「つなぐ」「つなげる」社会科授業～
多様な子どもたちを包摂する社会科授業のつくり方 高岡 麻美・4

◆ 授業を深める社会科教室
社会科で考える多文化共生 金久保 響子・6

◆ やってみよう！社会科でAL
財政の学習を通して描く将来の日本の青写真 安田 紫織・8

◆ 授業研究 地理
知識構成型ジグソー法を用いた「関東地方」の学習－「消滅可能性自治体」資料から考える授業設計－ 梅村 唯斗・10

◆ 授業研究 歴史
「アブダクション（仮説推論）」を活用した
思考力の育成－イラスト資料を使った日本の近代化の
まとめ－ 田代 憲一・14

◆ 授業研究 公民
思考ツールで深める地球的課題の探究学習
－2度の表現活動で生徒が自身の資質・能力の伸びを可視化－ 松藤 望・18

◆ ICT活用の現在を訪ねる
デジタル教科書の現在と未来
～共同実証研究事業を通して見えてきたこと～ 帝国書院・22

◆ 著者を訪ねて
『社会科 中学生の地理』監修者 加賀美 雅弘 先生 帝国書院・24

◆ 帝国書院の日本“社会科”探訪
北海道の酪農編 帝国書院・26

◆ 史料にみる歴史
鎌倉武士のふたつの暮らし
『男衾三郎絵詞』のなかの都と東国 黒田 智・28

◆ キャッチ！日本と世界の動き・30

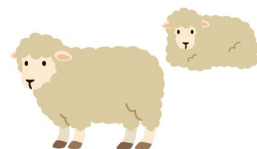
帝国書院

表紙写真：南島のカンタベリー平野（ニュージーランド）
羊とサザンアルプス



ニュージーランドを訪ねて

2025年6月、取材班はニュージーランドを訪れた。ニュージーランドにはどのようなイメージがあるだろうか。羊、ラグビー、留学、そして雄大な自然。実際に訪れることで見えてきた、ニュージーランドの現状を紹介していく。



地図帳参照ページ→p.77～78



■ニュージーランドの自然

取材班が訪れた6月末は南半球の冬。ウインタースポーツ目当ての旅行者は多いが、観光客は比較的少ない時期であった。真夏の東京を発って最初の目的地のク



↑今回の訪問地とルート（『中学校社会科地図』p.78）

インスタウンでは最高気温でも10℃、夜間は氷点下まで冷え込んだ。西岸海洋性気候に属し、一年を通して温暖だが、「一日に四季がある」と表現されるほど一日の寒暖差が激しい。今回の取材でも数分間の激しい突発的な雨が繰り返されるなど、変化に富んだ天候に直面した。人口の75%が集中する北島は、火山活動が活発でなだらかな牧草地が広がる。一方、南島にはサザンアルプス山脈が背骨のように走り、氷河の侵食を受けたフィヨルド(写真①)、広大なカンタベリー平野など、手付かずの大自然が残されている。取材班は「羊とサザンアルプス」の写真(表紙写真、ドローン撮影)を撮影するため、カンタベリー平野を一日中レンタカーで走り回り、その広さを実感した。

■ニュージーランドの産業

都市部を少しでも離れると、広大な牧場が延々と続く風景に様変わりする。羊ばかりと思いきや、牛もかなり多いように感じる。ニュージーランドの羊の頭数は、かつては国民1人当たり約22頭といわれたが、1982年の約7000万頭をピークに減少を続け、現在は1人当たり約4頭と、統計開始以来の最低水準となっている。その背景は、牛乳や乳製品の海外需要に対応するため、酪農



への転換が増えていることや、キウイフルーツ（写真②）やワイン用ブドウなど、高収益な作物への転換などが挙げられる。国内で最も多く飼育されている羊は、肉と毛の両方を生産する兼用種の代表格である「ロムニー種」で、全頭数の半数以上を占めている。肉質が良く食肉用として人気があり、かつ羊毛は太くて丈夫なため、カーペットや毛布の原料として世界的に評価されている。一方、近年はヨーロッパなどへの輸出用として、より高品質な繊維を得るためにアルパカを飼育する農家も増えている（写真③）。アルパカの毛は、羊毛に含まれるラノリンという油脂成分に敏感な人でも使いやすい素材として注目され、普及が進んでいる。なお、ラノリン自体は保湿力に優れた成分として知られ、空港の土産店ではハンドクリームなどの製品として販売されていた。

■ニュージーランドの伝統文化

約200年前にイギリス人が入植する前からニュージーランドに先住していたマオリは、ポリネシア東部からカヌーで約800年から1200年ほど前にニュージーランドに上陸したといわれている。今でも人口の約18%を占め、幼児教育から高校教育のさまざまな場面で、マオリ語や文化についての教育プログラムが取り入れられている。マオリ語は1987年に成立した法律で公用語の一つとなり、取材中もマオリ語と英語が併記されている交通標識が多く見られた（写真④）。

■ニュージーランドの環境政策

総発電量に占める再生可能エネルギーの割合が約85%に達するクリーンエネルギー先進国である。南島を中心に豊富な水資源と急峻な地形を活用した水力発電のほか、北島の火山活動を利用した地熱発電に加え、年間を通して偏西風が安定して吹く地方を中心に、風力発電が拡大している（写真⑤）。ニュージーランドでは、マオリの伝統的な「自分たちは自然の一部」という精神が背景にあり、環境保全に対する意識が高いのではないかと現地ガイドが語ってくれた。取材班は、地熱発電所が多く点在する北島のタウポ近郊で、先住民マオリの事業体「トゥアロパキ・トラスト」と合併会社「Halcyon Power」を設立した大林組を取材した（写真⑥）。地熱発電を利用して、製造工程においても二酸化炭素を排出せずにつくられた水素は「グリーン水素」と呼ばれる。水素を燃料とする自動車の研究開発、さらに船舶・航空機燃料としての利用や、水素燃焼でタービンを動かす水素燃焼発電にも期待が寄せられており、幅広い領域で実用化に向けて取り組みが進められている。

取材後記 今回の取材では、雄大かつ厳しい大自然を目の当たりにしながら、先住民マオリの文化を背景にした産業や生活の一端を垣間見ることができた。留学先として根強い人気のニュージーランドは、語学のみならず、自然や環境問題、先住民文化の尊重など、まさに学びの場にふさわしい国であった。

第3回

社会科授業のつくり方～「つなぐ」「つなげる」社会科授業～

多様な子どもたちを 包摂する社会科授業のつくり方

玉川大学教職大学院 特任教授、元全国中学校社会科教育研究会会長 高岡 麻美

1 はじめにー多様性の包摂ー

令和7年9月25日の教育課程企画特別部会で「次期学習指導要領に向けた基本的な考え方～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～」が示され、その中の1つに「多様性の包摂」が挙げられました。このことは、「どの学校でも、多様な個性や特性を有する子供が在籍している実態が顕在化」し、「多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題」であることが前提となっています。

図1を見て、先生方のご経験からうなずけるものがあるのではないのでしょうか。

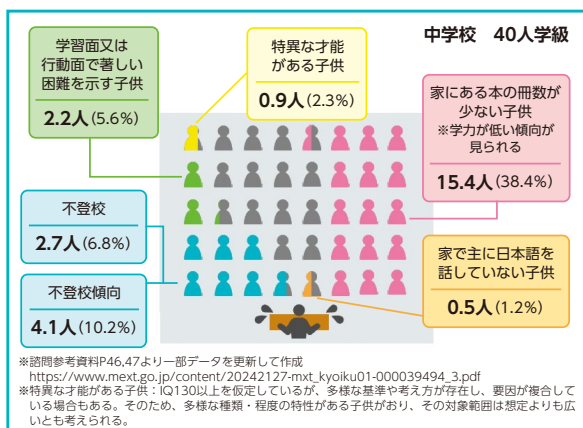


図1 文部科学省 教育課程企画特別部会論点整理（令和7年9月25日） p.14 検討の前提（児童生徒の実態）より作成

2 学習指導要領から

学習指導要領総則「第4節 生徒の発達の支援」
 「2 特別な配慮を必要とする生徒への指導」には「個々の生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする」と示されています。各教科等においては学

習上の困難に応じた指導内容や指導方法の工夫が規定されて、学習指導要領の各教科解説には、それぞれ「配慮事項」として「困難さ」「指導上の工夫の意図」「手立て」の順にいくつかの例が記載されています。例えば中学校学習指導要領解説社会編第3章1（4）には、以下の例があります。

困難さ「地図等の資料から必要な情報を見付け出し、読み取ったりすることが困難な場合」
指導上の工夫の意図「読み取りやすくするため」
手立て「地図等の情報を拡大したり、見る範囲を限定したりして、掲載されている情報を精選し、視点を明確にする」

地図の読み取りを指示したとき「どこを見ればいいの？」と混乱する生徒がいたら、どうされますか。例えば「拡大」機能のあるデジタル教科書やタブレット端末を活用することが考えられるでしょう。また索引を使って具体的に指示し「範囲を限定」して、焦点化する工夫もあります。上記の**手立て**では、そのように記述されています。また、以下の記述もあります。

困難さ「学習過程における動機付けの場面において学習上の課題を見いだすことが難しい場合」
指導上の工夫の意図「社会的事象等を読み取りやすくするため」
手立て「写真などの資料や発問を工夫すること」

例えば、先生方は、教材を提示する際「何が広がっているか」「前の時代と比較してどこが違うか」等社会的な見方・考え方を働かせるような発問をすることが常でしょう。また、具体的なイメージを湧かせるために視聴覚教材を活用することもあるでしょう。さて、これらは、特別な配慮が必

手立ては、全員の生徒へ分かりやすく、深く考えさせる指導の工夫と何ら変わることがないのではないのでしょうか。私は、配慮が必要な生徒への手立ては、全ての子どもたちにとって必要な手立てであると考えます。障害の有無にかかわらず、全ての子どもたちにとって学びやすい学習者主体の授業づくりを進めていくことが何より大切です。

ポイント

3 ユニバーサルデザイン化された授業とは

学級全体での指導の工夫と障害のある子供に対する個別的な対応の組み合わせ

教育的ニーズを踏まえた段階的なプロセスによる学びの場の検討

校内委員会を中心とした組織的な対応

特別支援学校
(特別的教育課程の編成)

通級による指導
(特別的教育課程の編成)

通級による指導を通常の学級での学びに生かす

通級による指導を柔軟に活用

障害の状態等を踏まえた指導内容や指導方法の工夫
(通常の教育課程の中での障害のある子供に対する個別的な対応)

特別な教育的支援を必要とする子供たちも念頭においた学級全体での指導方法の工夫
(多様性・包摂性を尊重した学習者主体の授業づくり、学校・集団づくり、教室環境の整備等)

通常の学級における基礎的環境整備に当たる

配慮を必要とする子供に対する合理的配慮の提供

配慮を必要とする子供に対する合理的配慮の提供

配慮を必要とする子供に対する合理的配慮の提供

困難が生じる要因に目を向けた工夫や手立て

こうした対応が全ての子供の学びやすさに繋がるといって重要

こうした取組によって必要な個別的な対応の内容も変わってくる

※特別支援学校の対象： 知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、弱視、聴覚、言語障害、自閉症・情緒障害、通級による指導の対象、言語障害、自閉症・情緒障害、弱視、聴覚、言語障害、注意欠陥多動性障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱

年3月東京都教育委員会)を参考に、授業を振り返る際の視点をあげてみます。

ワークシート・テスト問題等のUD化

例えば、ワークシートが見やすい文字フォントや分かりやすいレイアウト、書き込みやすい記入枠の大きさになっているかなど、生徒の視点に立ってもう一度見直してみることは、全ての子どもたちにとって、意欲的に学ぶきっかけとなります。各教育委員会には、このような「授業づくりチェックシート」もあるので、探してみてください。

私たちの仕事は、多様な困難さで困っている子どもたちに必要とする教育的支援をすることです。現在、教科書では、全ての子どもたちにとって見やすく分かりやすい色調が工夫されていたり、歴史の教科書には紙面の右端に年表インデックスが設けられたりしているものもあります。また帝国書院のデジタル教科書には、読み上げ機能や総ルビ機能も搭載しています。これらを子どもたちのために積極的に活用するのも1つの方法なので、ぜひ試してみてください。

社会科で考える 多文化共生

茨城大学 教育学野 助教 かなく ぼ しょう こ 金久保 響子

筑波大学人文・文化学群比較文化学類卒・筑波大学大学院教育学学位プログラム博士後期課程修了、博士（教育学）。専門は社会科教育、地理教育、多文化教育。論文に「社会科授業における移民の生徒による学びの意味づけ」（社会科教育研究、148号、pp.13-25）など。



1 多文化共生を再考する背景

日本の文化的多様化が進んでいる。それは、政府が発表する在留外国人数の推移や、その国籍の多様性を見れば明らかである（図1）。そうしたなか現代の日本では、公的な場面や民間の企業などにおいて、多様性の尊重が促進されるようになった。

一方で、多様性の尊重は、多くの人々が日常的な不安や生きづらさを感じる中で、マイノリティのみが優遇されていることへの不満の高まりにもつながっている。この反多様性の高まりは特にアメリカ合衆国やヨーロッパなどで見られたが、一部で「日本人ファースト」という言葉を耳にするように、日本においても排外的な言動が見られるようになってきている。

このような反多様性の動きに対抗するためには、一度立ち止まり、多様性の尊重や多文化共生は誰のためのものなのか、なぜ重要なのかということのを改めて考える必要がある。そしてこれらの問いを考えることは、現代社会に散見される多様性の尊重は表面的なものに留まっていないか、本来の意味での多文化共生へと本当につながるのかという点を顧みる契機となる。

以上のように多文化共生の実現のために考えるべき問いは山積しているが、本稿では、多様な文化と向き合うために中学校の社会科教育でどのような工夫ができるかということについて論じる。

2 日本社会にすでにある文化的多様性に気づく

日本において、経済発展が進んだ後の1980年

代後半以降、在留外国人数は増加傾向にある。在留外国人には永住者や技能実習などの中長期在留者といった分類があり（図2）、全てを含めた数は2025年末時点で412万人ほどである。この受入数はOECD加盟国の中で上位に入る。日本政府は移民政策を採用していないが、日本はすでに多くの移民を受け入れている国なのである。

一方で、以上のような状況から1980年代以降に日本の文化的多様化が進んだと語られがちであるが、それ以前から日本には文化的な多様性がある。日本には、アイヌ民族や琉球の人々、そして植民地政策のもとで朝鮮、台湾、中国などから移住してきた人々などが数世代にわたって居住している。「日本は単一民族国家である」という認識はいまだに残っているが、日本は常に文化的多様性のある国である。中学校社会科では、特に歴史的分野において関連する事項を学ぶ際に、この事実に気づかせることが重要である。

3 文化の流動性に気づく

地球上に多様な文化があることを学ぶ点において、社会科教育、特に地理教育の役割は大きい。中学校社会科地理的分野では、文化の多様性を学ぶ場として学習指導要領の「B世界の様々な地域」などが該当する。この大項目では、自然環境との関係性などに注目して多様な文化を学ぶ。

これらの多様な文化を扱う際に気をつけたいのが、文化は決して固定されたものではなく、流動的であることに気づかせる点である。文化は自然環境のみにより決まるものではない。そして文化は生まれた場所に留まり続けるのではなく、人々

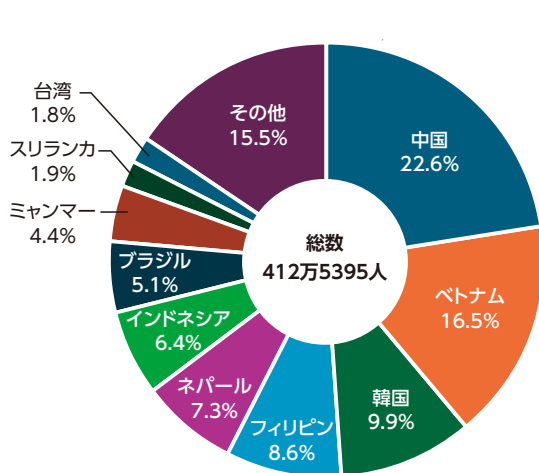


図1 国籍・地域別在留外国人の構成比

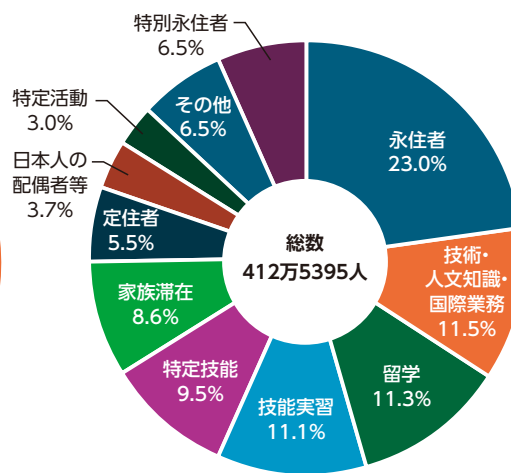


図2 在留資格別在留外国人の構成比

※どちらも2025年末時点

出入国在留管理庁「令和7年末現在における在留外国人数について」
(https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00062.html)
をもとに作成

が地球規模で移動することにより、人々と共に文化も移動をする。さらに、グローバル化により地球規模での人々の交流が活発になる中で、新しい文化を取り入れ、既存の文化を残しつつも文化は変化していく。グローバル化による食事や衣服の欧米化などが、その例である。

このような文化の流動性に気づかせることにより、「〇〇に住む人々は皆～～である」「〇〇教を信仰している人々は皆～～である」といった固定観念にとらわれにくくなる。さらに、世界各地の文化についての学びを遠い場所の他人事で済ませず、自らの地域にもある（今後あるかもしれない）文化として身近に感じる事が大切である。

4 みんなのための多文化共生

ここまで文化の捉え方について説明してきたが、最初的话题に戻し、多文化共生について考えたい。

マイノリティである人々の直面する生きづらさや不安は、例えば貧困や被災、孤立など、マジョリティの人々も時に直面する生きづらさや不安とつながっている。なぜならば、マイノリティの人々が直面する困難は社会に構造化されたものであり、同じ社会に生きる限り、誰もが直面し得るからである。

このような前提に立つと、マイノリティである人々の生きづらさや不安を解消するということは、決して誰かが得をして誰かが損をするということではなく、日本に住む誰もが公平に扱われ生きや

すくなるような社会へと変わっていくことを意味する。そのような意味で、多文化共生は他人事ではなく、日本に住むみんなのために、実現させるべきなのである。

5 社会科で多文化共生を考える意義

前述の通り、多文化共生の実現のために必ず通る差別や不平等の問題は、個人の問題ではなく社会に構造化された問題である。つまり、個人が差別的な言動をしないようにし他人を思いやることのみでは、多文化共生は実現されない。もちろん、個人個人の意識もとても重要であるが、社会が構造的に変化しなければ多文化共生は実現されない。

だからこそ、社会の在り方を学び考える社会科教育において、多文化共生を扱うべきである。他人を思いやるという態度の育成のみで終わらせるのではなく、社会科の授業において、社会のどのような構造が不平等へとつながっているのか、その不平等を解消するにはどのようにすればよいのかを考えることが重要である。それこそが、多文化共生を実現させるための社会科教育の役割ではないだろうか。

本稿の内容に興味を持たれた読者の先生方には、以下の参考文献などをすすめる。

<参考文献>

- ・岩淵功一『多様性とどう向き合うか—違和感から考える』岩波新書、2025年
- ・塩原良和『共生の思考法—異なる現実が重なりあうところから』明石書店、2025年

財政の学習を通して描く将来の日本の青写真

兵庫県 加古川市立義務教育学校両荘みらい学園（後期課程） 教諭 やすだ しおり 安田 紫織

1 はじめに

中学生は「増税」という言葉に敏感である。消費税率の上昇、防衛費の増額や少子化対策に伴う国民の負担の増大などが話題に上ると、生徒たちは「増税反対！」「国民の負担を増やそうとする政治家は悪人だ」と、政権批判の嵐が巻き起こることがしばしばある。確かに、安易な増税には賛成できない。しかし、「増税＝悪、減税＝正義」のような二元論で税や財政の問題を捉えてよいのだろうか。財政の現状や少子高齢化など現代社会の特色を踏まえて考察してこそ、望ましい財政の在り方について判断できるのではないか、その問題提起として、本授業を構成した。

2 授業の構成とねらい

授業の導入として、帝国書院『社会科 中学生の公民』（以下、教科書）p.157「アクティビティに挑戦 救急サービスの有料化について考えよう」を取り上げ、次に関連するニュース動画を視聴させる。そして、身近な公共サービスおよび社会資本を想起させ、その維持は「税」という形で国民が負担するという財政の基本的な考え方について理解させ、充実した公共サービスや社会保障を維持していくための「受益と負担の均衡」という視点に気づかせる。その上で、複数の資料の読み取りを通して日本の財政の現状と課題を捉え、財政収支の均衡を図るにはどのような方策が必要なのか、自分が考える望ましい財政の在り方とは何か、「将来の納税者」として課題の解決に主体的に関わろうとする公民的資質を育むことが本授業のねらいである。生徒の思考を深める単元構成は次の表のとおりである。

時	学習内容	学習課題
1	日本の財政の現状から今後の動向を予想し、自分たちはどのように関わっていくべきなのか「将来の納税者」として、自分の立ち位置を明確にする。	①日本の財政にはどのような特徴があるのだろうか。 ②日本の財政は今後、どのようになると予想されるか。 ③日本の財政について、私たちはどのように関わっていけばよいだろうか。
2	日本の財政が抱える課題を解決するために必要な視点について整理し、将来の望ましい日本の財政の在り方について自分の意見を持つ。	①日本の財政が抱える課題を解決するにはどのような具体策が考えられるだろうか。 ②自分の考えを座標上にプロットしてみよう。また、そう考えた理由もあわせて答えよう。

3 授業の展開

【第1時】

生徒の思考を深めるには、多面的な読み取りが可能な資料を用い、答えが一つに定まらない非定型の問いを立てることが欠かせない。そこで用意したのが図1である。過去のデータと比較することで、社会保障費や公債金・国債費の増大など、日本の財政の経年変化に気づくだけでなく「1988年と比べ所得税や法人税の割合が減少しているのは、働き手が減って稼げないからではないか」など、既習事項と関連づけて考える生徒もおり、資料を精選することで、多様な思考が促される。

ここで「つまり、日本の財政はどのような状態であると言えるか？」と思考を統合するような問いを投げかける。「税収入だけでは足りず、借金をすることで成り立っている状態」「将来の世代に影響がありそう」など、重要なキーワードを焦点化し、解決すべき課題について整理していく。「物価高などもあるし、これから公債金が増えていくのではないか」など現在の社会情勢とリンクさせて発表する生徒も増え、活発な議論が始まる。

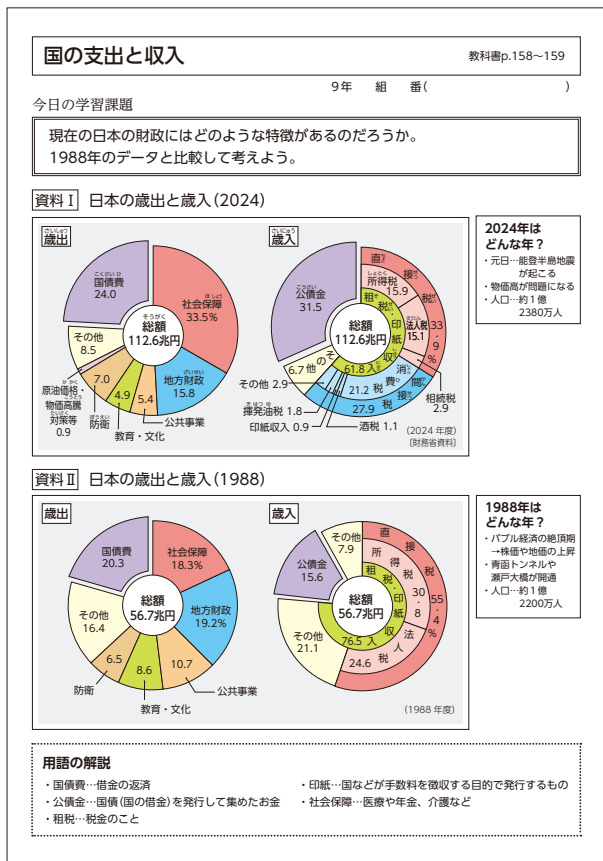


図1 ワークシート

続いて、「今後どのようになると予想されるか」を追加資料を提示して考えさせた。使用したのは、①国の財政を家計に例えると(全国間税会総連合会「もっと知ろうもっと考えよう 国の財政と消費税の役割」より)、②財政法第4条、③「日本の人口構造の変化」(教科書p.102)、④消費税減税すべきか「選択の夏」(日本経済新聞2025.7.8)の4つである。感情的に増税反対と言っていた生徒も、社会保障費の増大は避けられないこと、人口の減少が予想される中での減税の難しさに気づき、「これから日本はどうなるのだろう」と自然に次の課題を見据えて思考を継続している様子であった。授業の最後には「納税や今問題になっている情報を把握することが大事」「若い人も減税しろと言うからには、普段から税や国の財政に関心を持って、積極的に政治に参加しないといけない」など、財政や政治に関心を持ち、自分事として学ぼうとする姿勢が見られた。

【第2時】

第2時は、歳入・歳出に関わる課題を解決するための具体策について考えさせるところからスタートした(図2)。「社会保障費の削減」という

歳入・歳出に関わる課題を解決するには、どのようなことが必要だろうか。

歳入	・消費税の税率を上げる ・消費税の減税はやはり必要 →生活が楽になる→消費に回す→景気がよくなる ・定年を延ばすことで所得税の税収を増やす →年金など社会保障費の削減にもつながる
歳出	・社会保障費を減らしていくことも必要 ・医療費の削減のために市販薬での対応を増やす ・税金の使い方を変えていく必要がある →優先順位をつける

図2 授業の板書

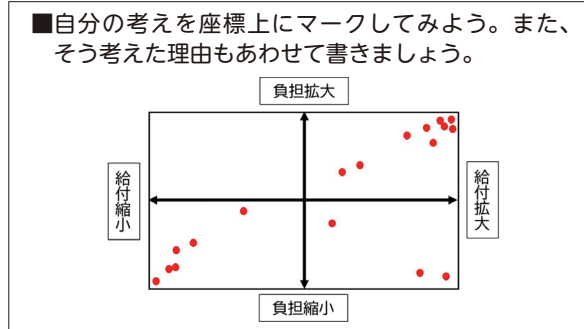


図3 社会保障の給付と負担

意見に対し「弱者を切り捨てる考え方は問題なのでは？」という反対意見が挙がり、教室内がしばらく某討論番組のようになる一幕もあった。

これらの議論を踏まえた上で、教科書p. 165「アクティビティに挑戦 給付(受益)と負担について考えよう」の思考ツールを活用し、生徒は自分の考えを座標上にプロットした(図3)。

結果は、ほぼ「負担拡大・給付拡大」と「負担縮小・給付縮小」に二分された。前者の判断の根拠は「リスクへの備え・国の将来への投資」、後者は「リスクへの備えは自己責任、お金の使い方の自由度を高める」という意見に包括された。大きい政府・小さい政府どちらを理想とするのか、思考の根拠を明確にし、自分が思い描く望ましい財政の在り方について判断していた。

4 おわりに

税は高いより安い方がいい。それは誰だってそうである。しかし、そのような理想論を乗り越え、どういう社会が望ましいのか、それをどう維持していくのか、そのためには何が必要なのか、社会全体に関わる思考を深め、今学習していることが自分にとってどのように関係するのか、主体的に考え続けられるような生徒を育成したい。



知識構成型ジグソー法を用いた「関東地方」の学習

—「消滅可能性自治体」資料から考える授業設計—

群馬県 高崎市立矢中中学校 教諭 うめむら ゆいと 梅村 唯斗

1 はじめに

次期学習指導要領の作成に向けた報告書が令和7年9月に、「論点整理」として文部科学省教育課程企画特別部会より出された。そこでは、現行学習指導要領と大きく方向性を変えることなく、現在と同様に主体的・対話的で深い学びの実装が強調されている。本稿では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践として、「単元を貫く課題の設定方法」と「課題追究の方法」に注目した実践を紹介する。

2 学習の流れ

今回は、帝国書院『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）p.233～248 第3部第3章第5節日本の諸地域「関東地方」での授業実践を紹介する。単元指導計画は以下の通り6時間での構成とした。

表 単元指導計画「関東地方」

時	学習内容
1	単元を貫く課題の設定
2	関東地方の自然環境
3	多くの人が集まり、発展する都心部
4～6	「関東地方の生活面での特色と課題」 「関東地方の農業面での特色と課題」 「関東地方の工業面での特色と課題」 単元を貫く課題の解決

1時間目では、単元を貫く課題「人口の移動によって起こる関東地方の問題とはどのような問題で、どのような解決策が考えられるのか」を設定する。2時間目と3時間目では、なぜ関東地方に人口が集中するのか、その理由を「自然環境」「首都機能」から考察する。4時間目から6時間目にかけては、関東地方で人口が集中することにより起きている問題とその解決策を、「生活面」「農業面」「工業面」から捉えていく。その際、知識構成型ジグソー法を活用して、問題と解決策を捉えていき、そのまま、単元を貫く課題を解決していく。

3 工夫①「単元を貫く課題の設定方法」

本単元での第1時に当たる部分である。単元を貫く課題の設定については、どの学校でもその設定方法に苦慮されていることかと思うが、主体的・対話的で深い学びの実現には、生徒が自ら学習課題をたて、学習を進めていくことが欠かせない。本実践では「生徒が「なぜ？」と思いたくなる資料の提示」、「生徒の自然な思考過程に沿った課題の設定」の2点に着目して、授業計画をたてた。

まず、「生徒が「なぜ？」と思いたくなる資料の提示」については、「消滅可能性自治体マップ」を活用した。「消滅可能性自治体」とは、2023年から2025年にかけて設置された有識者でつくる民間研究機関「人口戦略会議」（三村明夫議長）によって公表された（図1）。9つの分類に基づく地方自治体の持続可能性についての情報を朝日新聞社が独自にマップにまとめてものが図2である。

考え方を働かせつつ、生徒が自ら課題を設定できるように発問を計画した。

(消滅可能性自治体マップについて説明したのち)

先生「消滅可能性が高い自治体と低い自治体はそれぞれどのような場所に広がっていると思いますか？」

生徒「(消滅可能性が) 高い自治体は関東地方の地方部に、低い自治体は関東地方の中心部に広がっていると思います。」

先生「では、なぜこのような違いが生じてしまうのだと思いますか？」

生徒「地方部から中心部にかけて人口が移動してしまうからだと思います。」

先生「では、ここまでの流れについての自分の疑問点をいくつかあげてみよう。」

生徒「なぜ地方部から中心部へと人口が移動するのか？」

「人口が移動することで起こる問題とはどのような問題か？」

先生「では、今出た疑問点を踏まえて、自分なりの単元を貫く課題を設定してみよう。」

以上のような流れで、単元を貫く課題を設定していく。学校の実情に応じて、学習形態を工夫したり、追加で資料を提示したりしてもよい。大切なのは、自分が住んでいる地域で、中心部と地方部に人口の面で大きな違いがあり、その違いから問題が起こっている可能性があることに生徒が気づけるかどうかである。そのための資料として今回は消滅可能性自治体マップを活用し、単元を貫く課題の設定を構想した。

4 工夫②「課題追究の方法」

本単元の第4時から第6時に当たる部分である。この3時間を、知識構成型ジグソー法を活用して、生徒一人一人が単元を貫く課題に対する自分なりの答えを導き出せるように進めていく。

知識構成型ジグソー法は大きく「①課題把握」、「②エキスパート活動」、「③ジグソー活動」、「④

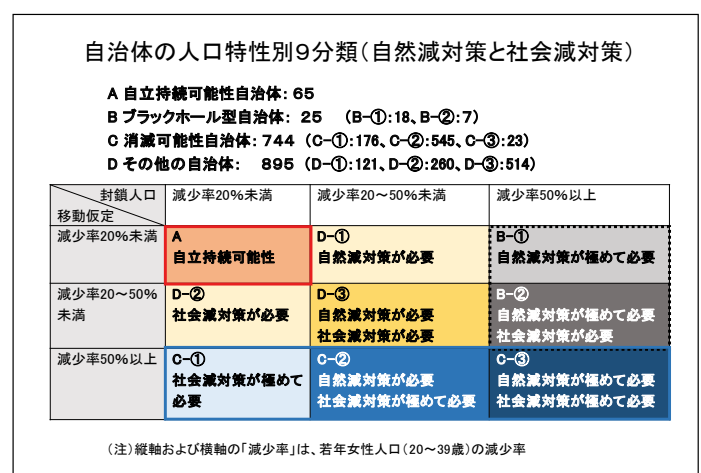


図1 自治体の人口特性格9分類の図 令和6年・地方自治体「持続可能性」分析レポート/令和6年4月24日 人口戦略会議

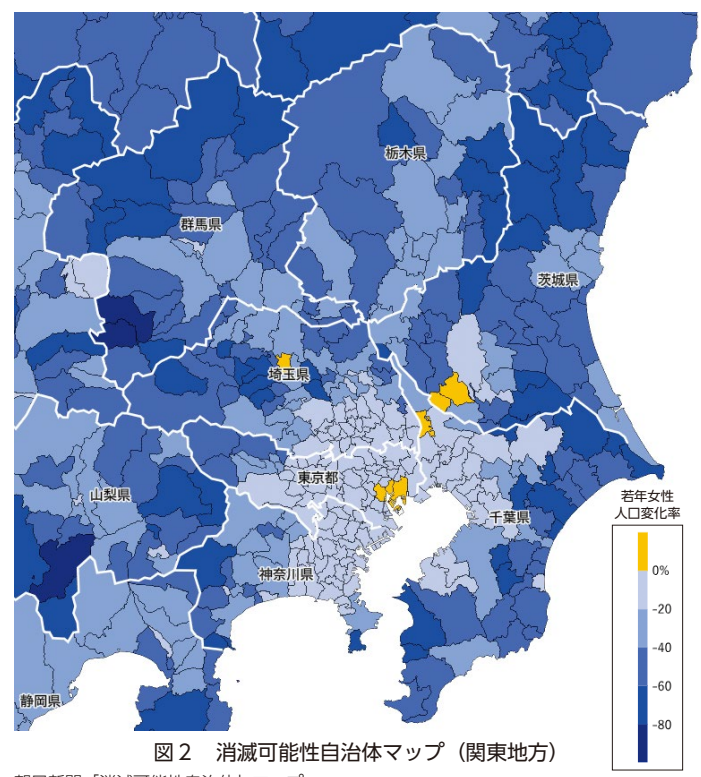


図2 消滅可能性自治体マップ(関東地方)
朝日新聞「消滅可能性自治体」マップ
<https://www.asahi.com/special/population2024/>

図2を参考によると、関東地方の地方自治体の中にも、消滅可能性が高い自治体と低い自治体とともに分布していることが分かる。筆者が勤務している高崎市を含め、関東地方にこのように消滅可能性自治体が広がっていることは生徒の素朴な疑問を生み出すのに有効なのではないかと思い、活用した。

次に「生徒の自然な思考過程に沿った課題の設定」についてである。本校生徒の実態に合わせて、以下のような問いの流れで、生徒の地理的な見方・

社会科授業プリント(地理) 教科書 p240～241

第3部 日本のさまざまな地域 第3章 日本の諸地域 関東地方

3. 東京大都市圏の課題と対策

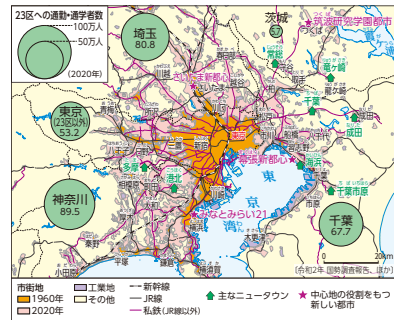
年 組 番 名前

関東地方の単元を貫く課題：

人口の移動によって起こる関東地方の問題はどのような問題で、どのような解決策が考えられるのか？

今回の課題：単元を貫く課題を解決するために、関東地方の様々な面の問題点と解決策を調べよう。

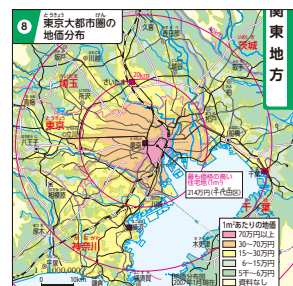
資料1 東京大都市圏の拡大と東京23区への通勤・通学者数



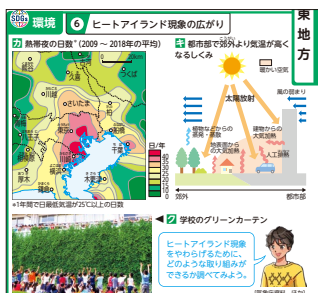
資料2 (写真提供：Getty イメージズ) 通勤・通学時間帯に混雑する新信駅



資料3 東京大都市圏の地価分布



資料4 ヒートアイランド現象の仕組み



◎それぞれの資料からどのようなことが読み取れるか？

- 1
- 2
- 3
- 4

◎資料からどのような問題が読み取れるか？

◎その問題はどのような理由により起こるのか？

◎その問題の解決策はどのようなものが考えられるか？

資料1～4はいずれも『中学校社会科地図』、『社会科 中学生の地理』より

図3

クロストーク」、「⑤個人で課題解決」という流れをとるが、今回は、①・②を第4時で行い、③～⑤を第5時、第6時に行うという流れで授業を計画した。それぞれの場面での活動について、詳しく説明していきたい。

まず第4時だが、ここでは、単元を貫く課題を解決していくために関東地方のさまざまな面で起こっている問題とその解決策について考察していく。「①課題把握」では、今までの「日本の諸地域」の学習を振り返り、地域の問題を捉えるためにはどのような面に注目するとよかったかと発問し、さまざまな面から地域の問題点を見ていくことを確認する。

「②エキスパート活動」では、関東地方の問題点と解決策を生活面・農業面・工業面に分けて、考察を進めていく。紙面の都合上、ここでは生活面のワークシートのみを掲載している(図3)。ワークシートには、左側に問題を読み取るための資料を添付し、右側に「それぞれの資料からどの

ようなことが読み取れるか?」、「資料からどのような問題点が読み取れるか?」、「その問題はどのような理由により起こるのか?」、「その問題の解決策はどのようなものが考えられるか?」という問いを設定している。この4つを問いに設定した理由は、解決策を考える際に、原因を明確にしながら考えられるようにしたかったからである。ただ解決策を調べるだけの活動にすることなく、根拠に基づいた提案を目指したい。

第5時から第6時にかけては、もう一つのワークシートを用いる(図4)。ここでは、ワークシートの左側を使って「③ジグソー活動」を行い、右側を使って、その後の「④クロストーク」、「⑤個人で課題解決」を行えるようにしている。前半のジグソー活動では、前時で行ったエキスパート活動からどのような共通点が考えられるかを表にまとめていく。この活動を通して、各班で自分たちなりの単元を貫く課題に対する答えを考えさせていく。

関東地方の単元を貫く課題：

人口の移動によって起こる関東地方の問題はどのような問題で、どのような解決策が考えられるのか？

今回の課題：ここまでの学習を踏まえて、単元を貫く課題を解決しよう。

◎エキスパート活動で学んだことを整理しよう。

視点	問題	原因	解決策
生活面			
農業面			
工業面			

◎各班で単元を貫く課題に対する答えを考えてみよう。

◎各班の発表で気づいたこと

◎ここまでの学習を踏まえて、単元を貫く課題に対する自分の答えを記入しよう。

図4

後半のクロストークの時間では、生徒が各班で考えた単元を貫く課題に対する答えを発表していく。発表内容に応じて、生徒に適宜質問する場面を設けたり、教師が発表内容をさらに深く考える発問をする場面を設けたりする。聞く側の生徒は、学習プリントの「各班の発表で気づいたこと」の欄に、自分たちの班とは異なる視点から考え出された意見や、自分がこの後、単元を貫く課題に対する答えを書くときに活用できそうな意見を中心に記述していく。

最後の個人での課題解決の時間では、ここまでの学習を踏まえたうえで、自分なりの単元を貫く課題に対する答えを記述していく。

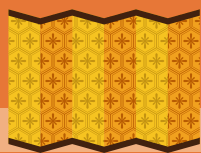
知識構成型ジグソー法は、エキスパート資料の作成に教師の力量が試されるといわれるが、授業のねらいや生徒の実態に応じて、教科書や地図帳の資料のみでも作成は十分に可能であり、その資料に基づいて、深い学びを行うことも十分に可能であると筆者は考える。

5

おわりに

現行学習指導要領で初めて記載された「主体的・対話的で深い学び」という語が登場して、すでに約10年が経とうとしているが、その学びを実現させられていると自信をもって答えられる教師がいったいどれほどいるだろうか？筆者も手探りの状態で、あの手この手を尽くしている状況である。

しかし授業中に、普段社会科に関心を示さない生徒がふと「分かった！」という表情を見せる瞬間がある。自分なりに課題意識をもって授業に取り組み、課題追究のため、さまざまな資料を読み取ったり、他者と意見を交換したりし、見方・考え方を働かせつつ、学んできたことをつなげて、課題解決へと自分の力で向かうことができたときに、生徒はそういった表情を見せるのであろう。これからもそういった生徒の表情が見られるような授業設計を心がけていきたい。



「アブダクション(仮説推論)」を 活用した思考力の育成

—イラスト資料を使った日本の近代化のまとめ—

東京都 八王子市立上柚木中学校 主任教諭 田代 憲一 たしろ けんいち

1 はじめに

歴史の授業は説明中心の授業になりがちなので、単元や授業をつくる際に生徒の思考力を育成する問いの設定や単元(授業)の構成を意図的に行う必要がある。

帝国書院『社会科 中学生の歴史』(以下、教科書)の特色であるイラスト資料(タイムトラベルなど)を、単元の導入や振り返りに活用した実践が多く行われている。その中で、特に単元のまとめ(振り返り)でイラスト資料を使って、どのように時代の特色や今の時代とのつながりを考えさせるのかに悩む教員もいるのではないかな。

そこで本稿は、イラスト資料を使って時代の特色や今の時代とのつながりを、「アブダクション(仮説推論)」を活用して生徒に考えさせる授業実践を紹介する。

「アブダクション(仮説推論)」とは、アメリカの論理学者C.S.パースが提唱した思考方法である。森(2016)は「アブダクション」を、事実について「思いつくままに仮説を列挙」して、その中から「最良の説明(最も理にかなった説明)」を「選択」することであると、社会科の授業に活用した研究を行った。その中で森は、思考力を育成する授業構成として、以下のものを提唱した。

導入：驚くべき事実の観察とそこへの疑念をもたせる。

「なぜ～なのか」

展開：①事実を説明する仮説を思いつくままに列挙する。

②最良の仮説(最も理にかなった説明)を選択させる。

③仮説の検討と検証を行う。

※①②の過程が、「アブダクション(仮説推論)」による仮説の構築である。

なお、単元のまとめ(振り返り)段階で「アブダクション(仮説推論)」を行うのは、①仮説の精度がある程度高いところからスタートできる、②振り返りの質が高まり、学習内容の意味づけができるからである。仮説をつくるには、ある程度の予備知識が必要になる。単元のまとめで、これまでの学習内容を振り返りながら仮説をつくることで、イラスト資料の表面的な読み取りだけでなく、背景にある歴史まで踏まえた仮説にすることができる。また本実践で、「アブダクション」による仮説の構築から仮説の検討・検証へと進む中で、学んだ内容を自分なりに意味づけたり、歴史的意義について考えたりする生徒が多数見られた。これは、「アブダクション」によって思考が深まったからである。

森(2016)の提唱した授業構成を参考にして、イラスト資料を使って日本の近代化の単元のまとめ(振り返り)の実践を行った。

2 「アブダクション(仮説推論)」を活用した授業

本実践は、第5章「近代国家の歩みと国際社会」のまとめ(振り返り)として、森(2016)の提唱した「アブダクション」を活用した授業構成を参考に、1時間の授業として行った。



資料A 『社会科 中学生の歴史』 p.168～169 「世界とのつながりを考えよう～イラスト編②産業革命期のイギリス」



資料B 『社会科 中学生の歴史』 p.184～185 「タイムトラベル⑨明治時代を眺めてみよう」

私たちは、19世紀後半のイギリスの工業が盛んな都市に
来ています。①このころの日本は明治維新の直後で、欧米を
見習った国づくりを進めていました。また、②この時代のヨー
ロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えてい
ます。

教科書の記述「都市の様子からつながりを考えよう」
(番号と下線は筆者による)

授業の導入では、教科書p.168～169「世界と
のつながりを考えよう～イラスト編②～産業革命
期のイギリス」のイラスト資料（資料A）と「都
市の様子からつながりを考えよう」の記述を使用
した。

この記述の、下線部①・②に注目させる。これ
までの学習から生徒は、19世紀後半のイギリス
が明治時代の日本に影響を与えていることは予測
できるが、現代の私たちの生活にも大きな影響を
与えていることは驚くべき事実として受け止めら
れる。そこで、p.184～185「タイムトラベル⑨
明治時代を眺めてみよう」のイラスト資料（資料
B）と比較させて、「Q1 なぜ①②といえるの
か？2つの資料を比較して仮説を立てよう」と問
うた。授業のワークシートは、Googleドキュメ
ントで配布し、作業の効率化を図った。

次に「アブダクション」を活用した「仮説の構
築」を行った。Q1の問いに対して、①「このこ
ろの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国
づくりを進めていました」といえる仮説と、②「こ
の時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活
に大きな影響を与えています」といえる仮説を考
えさせた。その際、イラスト資料の背景にある歴
史的な出来事を想起させるために、教科書やこれ
までの授業プリントを見直しながらか仮説を記述さ

せた。その後、グループ内で仮説について意見交
換させ、参考になった仮説を記録させた。グルー
プ内での意見交換を踏まえて、「Q2 他の人の
仮説を参考にして、①②といえる仮説として、最
も納得できる仮説とその理由をまとめよう」と問
うた。Q1からQ2までの展開が「アブダクショ
ン」であり、生徒の思考の深まりが見られた。

その後、自らの仮説を検証させるために、「Q
3 Q2で考えた仮説が本当に成り立つのか、調
べてみよう」と問うた。教科書や情報端末など
を使ってこれまでの授業内容を振り返り、Q2で構
築した自らの仮説について事実と一致するのかを

歴史の授業プリント

年 組 番 名前

～ 日本の近代化のまとめ ～

資料を読み取って日本の近代化についてまとめよう。

資料A 「産業革命期のイギリス」

(p.168～169)

資料B 「明治時代を眺めてみよう」

(p.184～185)

教科書の記述 私たちは、19世紀後半のイギリスの工業が盛んな都市に
来ています。①このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました。
また、②この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています。

Q1 なぜ①②といえるのか？2つの資料を比較して仮説を立てよう。

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」と
いえるのは・・・

自分の仮説

②「この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています」と
いえるのは・・・

自分の仮説

◆グループ内で仮説を発表して、参考になった仮説をメモしよう。

①の参考になった仮説

②の参考になった仮説

ワークシート1

Q2 他の人の仮説を参考にして、①②といえる仮説として、最も納得できる

仮説とその理由をまとめよう。

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」といえるのは・・・
最も納得できる仮説とその理由

②「この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています」といえるのは・・・
最も納得できる仮説とその理由

Q3 Q2で考えた仮説が本当に成り立つのか、調べてみよう。

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」のQ2で考えた仮説は成り立つのか、調べよう。

②「この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています」のQ2で考えた仮説は成り立つのか、調べよう。

ワークシート2

検証させた。ワークシートのQ3は調べたことをまとめるスペースとして自由に使わせた。仮説の検証のまとめとして、「Q4 Q3を踏まえて、①②のようにいえる理由をまとめよう」と問うて、日本の近代化についてまとめさせた。また、「Q5 Q2の仮説とQ4のまとめを比較して、気付いたことをまとめよう」と問うことで、「アブダクション」によって考えた自らの仮説と、近代化のまとめを比較させることで、自らの学びを振り返らせ、考え方の変化や学びの深まりを自覚させた。

3

評価と生徒の学び

本実践の評価は、ワークシートの記述内容で行う。ワークシートのQ4の①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」といえる理由と、②「この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています」といえる理由の記述内容を、

Q4 Q3を踏まえて、①②のようにいえる理由をまとめよう。【思考・判断・表現】

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」といえる理由

②「この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています」といえる理由

Q5 Q2の仮説とQ4のまとめを比較して、気付いたことをまとめよう。

【主体的に学習に取り組む態度】

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」の仮説とまとめを比較して気付いたこと

②「この時代のヨーロッパの生活が、今の私たちの生活に大きな影響を与えています」の仮説とまとめを比較して気付いたこと

ワークシート3

「思考・判断・表現」の観点で評価した。複数の視点から理由を説明しているものを「B」評価として、授業で学んだ内容を踏まえて具体的に複数の理由を記述しているものを「A」評価とした。

また、ワークシートのQ5の「仮説」と「まとめ」を比較して気付いたことの記述内容を「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価した。仮説とまとめを比較して自分の考えの変化を説明しているものを「B」評価として、特に自らの学びの深まりについて具体的に記述しているものを「A」評価とした。

ある生徒は、Q1の仮説①で以下のように記述した。

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」といえる仮説

・日本のイラストの左下に蒸気機関車を使い荷物を運搬している様子がある。ヨーロッパのイラストの方でも船に蒸気機関を取り付けて荷物は運搬していないけど人や石炭を乗せて移動できるようにしてある。

この段階での読み取りでは、蒸気機関に着目して、ヨーロッパから明治の日本への影響を考えて仮説を記述している。

そして、グループ内でのメモでは「議会とか国会の建物があるから、議会政治が始まったことがわかる」と記述し、仮説を交流する中で「議会政治」という新しい視点を得ることができた。

Q2の「最も納得できる仮説」では、以下のよう

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」といえる仮説

- ・ヨーロッパのイラストの方では右下で議会政治を行っている。明治の日本でも議会政治が始まっているので、見習っていることがわかる。

グループの話し合いを踏まえて、自らの仮説に「ヨーロッパの議会政治を明治の日本も見習った」という視点を入れて補強したことがわかる。

仮説の検証で学習の振り返りを行った後のQ4のまとめの一部に、以下のような記述が見られた。

①「このころの日本は明治維新の直後で、欧米を見習った国づくりを進めていました」といえる理由

- ・ドイツを参考に、近代国家の仕組みづくりが進められた。岩倉使節団がヨーロッパに渡り、憲法や議会制度を学びました。これが後の大日本帝国憲法につながっていくことになる。

「議会政治」の視点を発展させて、日本の近代化が欧米の影響を受けたことを具体的に記述できるようになった。

Q5の仮説とまとめの比較では、以下のように記述した。

明治時代の日本がどのように西洋を取り入れていったのかについて、理解の深まりをはっきりと表すことができたと思う。Q2では、主にイラストに描かれているものを手がかりに、蒸気機関車や議会政治の様子など日本がヨーロッパを「見習っている」という点を中心に述べていた。(中略)しかし、Q4では、単に「真似している」という表現にとどまらず、どの国のどの制度や技術を参考にしたのかが書けたところが大きな

変化だと思った。たとえば憲法はドイツの制度をモデルにして整えられたところ。(中略)こうした具体的な国名や制度名が挙げられていることで、明治政府の近代化政策がどれほど計画的で、目的を持って行われていたかがより深く理解できるようになっていると思った。(中略)このように、2つの文章を比較すると、「イラストに描かれているものを説明する」から「明治政府がどのような目的で欧米を参考にし、どのように近代国家を作ろうとしたのかを説明できる」へと大きく成長していることがわかった。最初は真似している日本という印象が強かったが、後の文章では国を守り、国際社会に認められるために必要な改革を進めた日本という、より深い歴史的視点が身についていると感じた。(下線は筆者による)

この生徒は、仮説の構築から仮説の検証を経て、明治政府の近代化の目的や計画性を深く理解し、それが「国際社会に認められるために必要な改革」だったと意味づけを行うことができた。このように、「アブダクション」を活用した授業構成によって生徒の思考の深まりが見られた。

4 おわりに

本稿では、歴史的分野の単元のまとめ(振り返り)の場面で「アブダクション(仮説推論)」を活用してイラスト資料を読み取る授業実践を取り上げた。

生徒のワークシートの記述を見ると、「アブダクション」の考え方を活用してイラスト資料を読み取る授業を実践したことで生徒の思考の深まりが見られたことから、歴史的分野の単元のまとめ(振り返り)として有効な授業だったといえる。

「アブダクション」を活用した授業構成は、歴史的分野の他の単元や地理的分野、公民的分野でも応用することができると考える。今後も、生徒の思考力を育成する授業構成について追究していきたい。

<参考文献>

- ・森才三「社会系教科授業における思考力育成の実践方略―パースの「アブダクションの論理学」に注目して―」『社会系教科教育学研究』第28号、2016年



思考ツールで深める 地球的課題の探究学習

— 2度の表現活動で生徒が

自身の資質・能力の伸びを可視化—

神奈川県 横浜市立潮田中学校 主幹教諭 まつふじ のぞみ 松藤 望

1

はじめに

学習指導要領の社会科の目標では、「課題を追究したり解決したりする活動を通して（中略）公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す」と記載されている。また、筆者の所属校でも中期学校経営方針の中期取組目標の一つに、「問題解決的な学習を通して生徒が主体的に学ぶ学習を推進し、学力の定着を図る」ことを掲げている。

では、具体的に問題解決的な学習をどのように進めれば生徒の資質・能力が伸び、その伸びを見取ることができるのだろうか。考えた結果、私は特に次の2点を重視して3年間の学びをデザインしてきた。

1点目は思考ツールの活用である。思考ツールを使うことで、情報や自分の考えを整理したり分析したりする力が高まるのではないかと考えた。そこで中学校1年次から段階的、継続的に思考ツールの活用を取り入れた学習を行ってきた。

2点目は複数回同じテーマで表現物を再構成することである。例えば問題解決的な学習においてはその学習の成果を新聞やスライド、ポスターなどにまとめて発表することになる。その際、他者の発表を聞いたり、自身の発表に対してアドバイスを受けたりすることで自分の考えが広がり深まる。そこで、もう一度同じ内容での表現の機会を設定することで、より効果的に資質・能力の伸びを図ることができるとともに、生徒自身も1回目と2回目の作品を見比べることで自身の伸びを実感できるのではないかと考えた。

本稿では、帝国書院『社会科 中学生の公民』（以下、教科書）の「第4部国際 第2節 地球的課題とその解決」について、「第5部 課題探究学習」を踏まえた学習展開の実践を紹介する。中学校社会科の最後の単元として上記の2点を踏まえた課題探究学習を行うことで、生徒が自身の資質・能力の伸びを実感できる学びを目指した。

2

単元計画と評価計画

本単元の単元計画および評価規準は次の通りである。

表1 単元計画（8時間）

時	主な学習内容
1	地球的課題の把握 探究したい分野の絞り込み
2～4	探究したい分野の整理 探究課題の決定 情報の収集・整理 発表用スライドの作成
5	グループでの1回目の発表
6・7	スライドの再構成
8	クラスでの発表 学習の振り返り

表2 単元の評価規準（例）

知識・技能	地球的課題に関するさまざまな資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。
思考・判断・表現	社会的な見方・考え方を働かせ、よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を多面的・多角的に考察、構想し、自分の考えを表現している。
主体的に学習に取り組む態度	よりよい社会を築いていくために解決すべき課題について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。

（帝国書院『社会科 中学生の公民』年間指導計画案をもとに作成）

3 具体的な授業の展開

1. 第1時では、まず教科書第4部の冒頭（教科書p.182～183）に掲載されている「学習の前に」のイラスト（図1）を活用し、次のような方法で地球的課題の把握および、探究したい分野の絞り込みを行った。

（1）地球的課題の把握（個人での学び）

図1に見られる地球的課題を、個人でロイロ

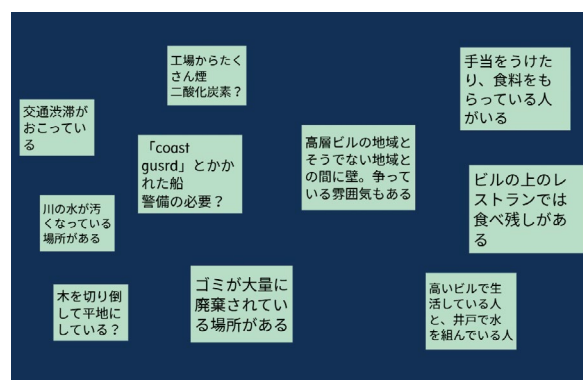


図2 Aさんの「シート」

ノートのシンキングツール「シート」に書き出す（図2）。

（2）他者参照

共有されたクラスメイトの「シート」を見て、さらに自分の「シート」に考えを追加する。このような他者参照の機会を設けることで、自分の考えを広げたり深めたりすることへつながる。その際、初めから他者の意見を参考にするのではなく個人での学びの時間を設けることも大切にしたい。

（3）地球的課題の分野別整理

次に、「シート」に書き出した地球的課題を「Xチャート」に分野別に整理する。なお、本実践では教科書のテーマに沿って、授業者より4つの分野を提示した（次頁、図3）。地球的課題は相互



図1 教科書p.182～183「亜熱帯気候の地域にある経済成長が著しいA国の様子」

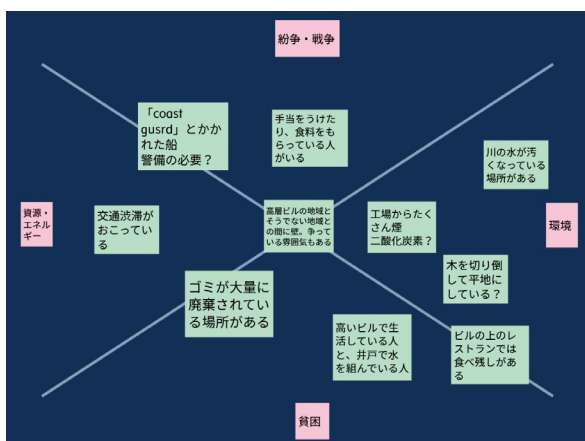


図3 Aさんの「Xチャート」

に関わり合っているものであり、きっぱり分けることができないことには留意したい。

(4) 探究したい分野の決定

「Xチャート」で整理した地球的課題の中から、探究したい分野を決める。

なお、ここでは探究したい分野とは、「環境」「貧困」などを指し、探究課題とは「なぜ難民は増え続けているのか」などといった、実際に生徒が探究する課題のことを指している。

2. 第2～4時では、次のような方法で探究したい分野の整理、より具体的な探究課題の決定、探究課題についての情報の収集・整理、発表のためのスライド作りを行った。

(1) 探究したい分野の整理

絞った分野について、教科書や端末を使い、その背景や関連する事象などについて調べ、シンキ

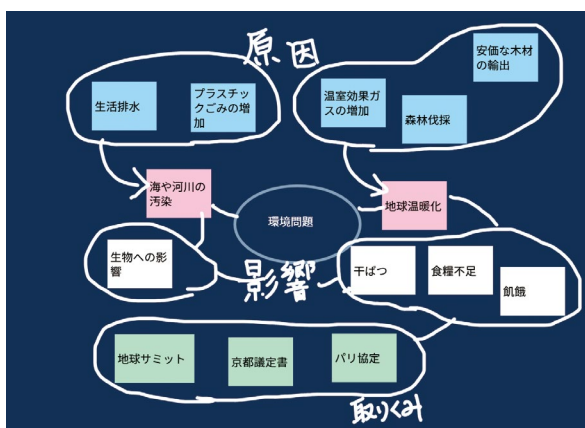


図4 Aさんの「ウェビング」(例)

ングツール「ウェビング」に整理する(図4)。

(2) 探究課題の決定

「ウェビング」での整理をもとに、より具体的な探究課題を決定する(表3)。探究課題は教科書p.217にも記載されている通り、抽象的になりすぎないように留意する。

表3 生徒の設定した探究課題(一部)

分野	探究課題
環境問題	電気をこまめに消すことが、地球温暖化の抑制にどれだけつながるのか。
紛争	なぜ難民は増え続けているのか。
貧困	なぜアフリカでは栄養不足人口の割合が高いのか。
資源・エネルギー	日本に最も適している発電方法は何か。
資源・エネルギー	再生可能エネルギーは、本当にエコなのか。

(3) 探究課題についての情報の収集・整理

設定した探究課題について、情報の収集を行う。その際、教科書やインターネットはさることながら学校図書館も十分に活用したい。私が所属する自治体では全ての中学校に学校司書が配置されている。そのため、本実践では事前に学校司書に授業の内容や生徒の探究課題を共有したことで、生徒がより効果的に図書館を活用することができた。

(4) 発表用スライドの作成

本実践では、ロイロノートのテキストカードを使って「スライド」の作成を行った(図5)。

3. 第5時では、作成したスライドを使って、4～5人のグループで発表を行った。1回目の発表を少人数にすることで、社会科に苦手意識をもつ生徒でも比較的自信をもって発表することができたように思う。また、作成したスライドを共有しておくことで、第6～7時での再構成の際に他者のスライドを参照できるようにした。

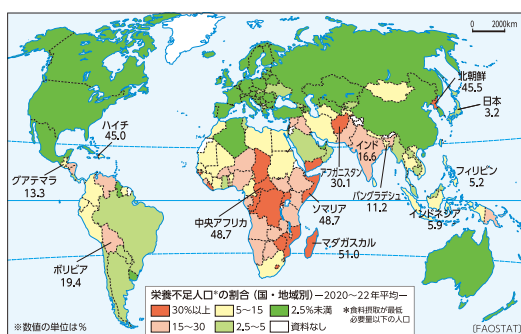
なぜアフリカでは栄養不足人口の割合が高いのか

3年



テーマ設定の理由

教科書P205の資料をみると、アフリカの栄養不足人口の割合が、他の地域に比べ高い。これまでの地理や歴史での授業で、その理由を習ったが、なぜ今もアフリカの貧困が続くのか気になったから。



栄養不足人口の割合

図5 Bさんの「スライド」の一部

- 第6～7時では、1回目の発表でグループのメンバーから出た質問や、アドバイスを参考に追加で情報を収集し、スライドの再構成を行った。
- 第8時では、再構成したスライドを用いてクラス全員の前での発表を行った。生徒は、すでにグループでの発表を行っているため、大人数の前での発表も比較的落ち着いて臨めていたように思う。また、発表後に自分の作った1度目のスライドと、修正を加え再構成したスライド

1度目にスライドを作ったときは、言いたいことをそのままとのべていたけれど、2度目は言いたいことから考えたことをまとめることができたと思う。

環境問題について調べました。二酸化炭素の増加についてまとめましたが、他の人の発表を聞き、食料などにもつながっていると思った。書きはじめて消す。

1度目の発表で書いたアドバイスを活かして、説明の順番を変えた。最初に結論を説明したうえで、集めた資料の説明した。分かりやすい発表ができたと思う。

図6 第8時の生徒の振り返りの一部

を見比べながら、振り返りを行った(図6)。

4 本実践の成果と課題

本実践は、思考ツールの活用と、スライドの再構成による過程を通して、生徒が自身の資質・能力の伸びを実感できる学びを目指した。

まず、思考ツールの活用については、「シート」→「Xチャート」、「ウェビング」と、段階的に活用することで、情報を整理・分析する力を養い、探究課題を明確化できたのではないかと考える。

スライドの再構成については、生徒の振り返りにもあるように2度目のスライド作りを通して自身の技能や思考の広がりを実感できた生徒が多くいたと考えられる。

なお、思考ツールの活用やスライド作成も、ノートやポスターもしくは画用紙などの紙媒体で行うことも可能である。しかしICTを使うことのメリットは再構成のしやすさにあることも併せて記しておきたい。

今後の課題は、限られた授業時間の中で生徒同士の相互助言の質をいかに高め、再構成の深さを担保するかという点にある。グループやクラスによっては、スライドへの質問やアドバイスが表面的なものにとどまり、深い学びへつながらない場合もある。そのような時に鍵となるのが授業者の問いかけであろう。課題探究学習を生徒に任せきりにせず、授業者自身も探究の姿勢を持続けることが深い学びに欠かせないものであると思う。

デジタル教科書の現在と未来

～共同実証研究事業を通して見えてきたこと～

帝国書院では、昨年度から社会科のデジタル教科書・教材の活用に関する共同実証研究事業を産学連携のもと行っています。今号は、中学校での社会科授業の実践報告を通して、収集できた知見やデータの中間報告となるシンポジウムの様子を紹介します。

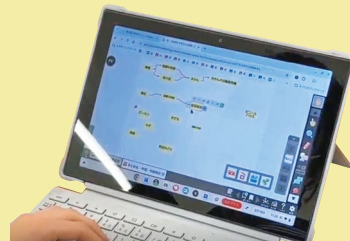
共同実証研究事業とは？

2030年度からデジタル教科書が正式な教科書として導入されるにあたり、2025年10月より、千葉大学・広島大学・愛媛大学・お茶の水女子大学それぞれと帝国書院が産学連携し、2カ年にわたる『中学校社会科の教科書特性に応じた一人一台端末とデジタル教科書・教材の活用に関する共同実証研究事業』（以下、事業）を開始した。今後の授業改善や教材開発、生徒の学びの深化に向けて取り組むこととしている。

お茶の水女子大学附属中学校で行われた地理的分野での研究授業



生徒の「まとめも」作成例



「まとめも」を使って事象のつながりを整理している様子

シンポジウムレポート

事業初年度を終えた中間報告として、授業の実践報告や講評、分析、分野別での質疑応答が行われました。

＜開催概要＞

日時・会場：2026年3月22日 9:30～12:00・成蹊小学校

参加者：教員（主に社会科）、教育学研究者、教員を目指す学生

テーマ：デジタル教科書の特性を生かした新たな社会科の授業開発
～千葉大学・広島大学・愛媛大学・お茶の水女子大学・帝国書院によるデジタル教科書共同実証研究の取組から～

約100名の参加者を前に、基調提案や帝国書院デジタル教科書の特長紹介などを経て、地理的分野、歴史的分野、公民的分野で実践された4つの授業の成果報告と指導講評がなされました。

例えば、「学びコネクト」※1を使った「琉球とアイヌ民族がつなぐ交易」の授業の実践報告では、授業冒頭の学習問題の設定において、学ぶ事象との“意外なつながり”を主体的に見つけられるようにした授業づくりについて紹介されました。生徒各自が、交易品やアジアとの関係に着目した問いなどを構想し、ワークシートに記入して進めていました。他にも「主題図比較」や「まとめも」※2など複数の機能を組み合わせ中国・四国地方の「地域おこし」の取り組みや背景を考察する地理的分野の授業や、「ぱんSim」※3を使って「具体」と「抽象」を往還する思考活動を通して概念理解を追究する公民的分野の授業など、デジタル教科書の機能を生かした実践例が紹介されました。

※1：学習内容に関するコンテンツを、各分野・時代横断的に閲覧できる機能

※2：教科書の本文などからカードを作成し、思考ツールを用いて整理できる機能

※3：経済単元を網羅したパン屋さん経営シミュレーションコンテンツ

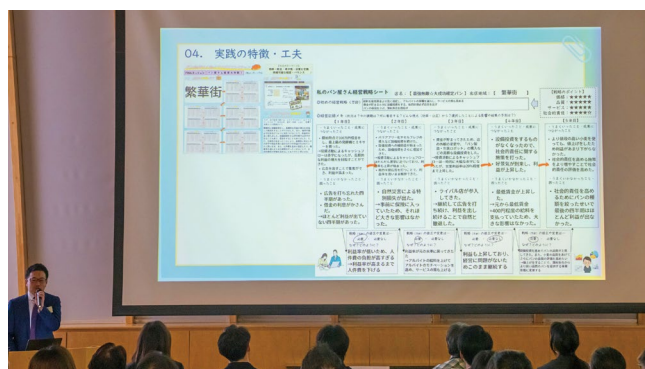
※1～3は現在の学習者用デジタル教科書+教材セットにて実装されている帝国書院のオリジナルコンテンツです。



▲広島大学附属中学校の久賀隆之先生による「学びコネクト」を使った授業の報告。「学びコネクト」で表示された中から生徒が“意外なつながり”を感じたものはどれかを紹介している様子。



▲「学びコネクト」ではそのページの学習内容に関する図や本文が他分野の教科書などから表示される。これにより、各時代のつながりや他分野との関連を主体的に考察できるようになると考えられる。



▲愛媛大学教育学部附属中学校の高橋祐貴先生による「ぱんSim」を使った授業の報告。生徒自身が経営戦略シートで、パン屋さんの経営シミュレーションを振り返り、分析した内容を紹介している様子。

著者を訪ねて

『社会科 中学生の地理』監修者

加賀美雅弘先生

経歴 東京学芸大学名誉教授・教育学部（地理学）特任教授。理学博士。研究分野はヨーロッパ地誌、エスニック地理学。関連著書多数。趣味はカメラ、映画鑑賞、街歩き、温泉・銭湯巡りなど。

帝国書院『社会科 中学生の地理』の監修を務める東京学芸大学名誉教授の加賀美雅弘先生に、地図に初めて触れた子どものころのことや、地理学を志した学生時代のこと、教科書作りに対する思いをうかがいました。

1 子ども時代のエピソードや、ご専攻の地理研究について

—— どのようなお子さんでしたか。

かこさとし
加古里子さんの絵本『かわ』（福音館書店）が好きでした。表紙と裏表紙の地形図に目を引かれ、川の流れて風景が変わっていく場面展開の楽しさはもちろん、絵や地図を見ながら旅ができることの楽しさも知りました。父とよく山歩きをした六甲山では、父の持つ地形図の地図記号と目の前にある花崗岩の岩肌が一致するという感動を味わいました。そういう体験も現在につながっていると思いますね。

—— ドイツ留学時代について教えてください。

大学院で地理学研究を始めた1980年代当時、私が取り組んでいた「疾病地理」という分野の研究は、必要なデータの入手が困難だったこともあり行き詰まりを感じていました。そんな私の転機となったのがドイツへの留学です。そこで出会っ

た恩師に「自分が面白いと思ったものを諦めず、道がなければ自分で切り開いていけばいい」と勇気づけられ、10年かけて論文にまとめることができました。自分の考えを相手に説明する姿勢や、相手とフラットに意見交流する感覚、他人は他人・自分は自分であるという考え方はドイツで学びました。近年、若者が海外に行かない、あるいは行けない状況が見られますが、ぜひ積極的に外に出て、外国でしか手に入らない感覚を獲得してきてほしいですね。

—— 特に印象深い巡検の思い出はありますか。

私が巡検を企画するときは、参加者の「なぜ」という疑問をかき立てることを心がけています。このような巡検のあり方を決定づけたのは、学生と同行したアウシュヴィッツ強制収容所（ポーランド）です。当初は旅行気分だった学生たちが、本でしか見たことのなかった虐殺の現場や遺品というリアルに対面して顔つきが変わっていき、「なぜこの場所が選ばれたのか」と自発的に疑問を抱き始めました。通常はバスで移動する2つの収容所の間を歩かせ、そこが低湿地であることを肌で実感させると、彼らはナチスがなぜこの場所に収容所をつくったのか深く考え始め、その夜のホテルでの討論は、それぞれが自発的に語り続けるほど熱い議論の場となりました。「みんなで行く」ということは、同じものを見た仲間の考えが聞けるということです。この経験以降、巡検では感じたことを共有し、ともに考える機会を設けるようにしています。



▲加古里子 作・絵
『かわ』（1966年、福音館書店）



2 中学校社会科の教科書作りについて

—— 教科書作りのエピソードを教えてください。

地理は「歩けば楽しい、違う国に行けば面白い」という、観光に近い魅力を持つ科目です。その魅



▲2005年3月、ハンガリーのブダペスト巡検にて。



▲学生を連れて巡ったベルリン巡検（2006年、3月）。

力が伝わるように、教科書には「人」の写真を積極的に使うことを心掛けました。そこに生きる人々がどのような表情で、どのような衣食住で生きているのかがまっすぐ伝わる写真を載せることで、読者に親近感を持たせたいと考えました。ページ数の都合で語り切れなかった内容は指導書や副教材で補えていますし、見ごたえのある教科書になっています。

これまでの教科書づくりで印象深かったのは、いわゆる「ゆとり教育」のときです。写真を大きく扱って、「1枚の写真から考よう」というスタンスは地理の魅力と相性が良く、楽しい教科書になると感じました。もちろん情報として知識は必要ですが、受験向けに知識を詰め込むだけでなく、世界にある多様な暮らしを知り、それが自分たちの生活とつながっていることを知るというのは地理本来の醍醐味といえます。このような地理の楽しさを子どもたちに伝えていきたいですね。

3 教科書を使って学ぶ子どもたちと地理の先生方に向けて

——教科書を通して、子どもたちに身につけてほしい力はどのようなものでしょうか。

地理は、「知識」「経験」「地理的想像力（イマジネーション）」という3つの要素を組み合わせることで、行ったことがない場所であっても全体像を自分で把握することができる分野です。とりわけ小中高の地理は、身近な自分の経験を踏まえた形で、徐々に広い地域を学んでいきます。つまり常に拠り所は自分の経験です。子どもたちには身近な地域の経験から、周囲の地域、果ては世界

が、自分の暮らしと何が似ていて何が違うのか、自分の暮らしとどう関係しているのかに敏感になってほしいですね。

——先生方へのメッセージをお願いします。

先生自身が地理にハマって楽しんでほしいです。地理には「現場」が存在するので、現場に行って写真に撮ったり、その場所の人に話を聞いたりして自分が面白いと思ったことはそのまま子どもたちに伝えることができます。先生が楽しんで「これ面白いよ」と言っていると、子どもたちは次第に「なんか面白そう」と引き込まれてくれます。先生と同じような面白さが実感できれば、子どもたちは自分なりの「面白い」を見つけに行くのではないのでしょうか。

また、実際に現場に行けない場合でも、イマジネーションを働かせて自信をもって説明してほしいです。そのためには、先生自身が日々の生活の中で、知識や経験を蓄えることが大事です。日頃の暮らしをベースにして、「きっとあの地域はこんな生活ではないか」と絵のようにして描けるものがあって初めて、地域が理解できるということになると思います。



（2026年5月にインタビューしました。）



日本で消費される牛乳やバター、チーズの原料の半分以上を生産し、日本の乳製品自給を支える北海道。

2025年7月、記録的な猛暑が続くなかで、取材班3名は北海道の酪農の最新の姿を取材した。

①



▲放牧酪農の様子 早朝に牛舎で搾乳を終えたあと、広大な敷地で放牧を行っている様子のドローン空撮。牛たちの奥に見える木々は、開拓時代の植民地区画に合わせて整備された「格子状防風林」の一部である。さらに奥には中標津町のシンボルでもある「武佐岳」が見える。



広大な農地で行われる 放牧酪農と近年の課題

北海道の乳製品づくりは、酪農の現場から始まる。取材班は早朝、中標津町で放牧酪農を営む小規模な家族経営の牧場を訪ねた (①)。中標津町農協管内では、放牧を行う牧場は町内にある150弱の牧場のうち、約4分の1にとどまるそうだ。取材した酪農家の方は、「家族経営では大規模化や機械化には大きな費用がかかるため、現在の小規模な経営を続けている。機械化は進んでいるが、人の手による管理で牛一頭一頭の細かな変化に気付いている (②)。後継者不足といった課題もあるが、地元の小中学生向けに出前授業を実施し、酪農の魅力も精力的に伝えている」と語った。

一方で、夏でも冷涼とされてきた北海道にも温暖化などの影響が及び、暑さによる牛の熱中症や乳量減少も近年課題となっている。これまで冷房設備が不要だった牛舎にも暑熱対策が求められ、酪農家の負担増加が懸念される。牛と人との距離が近い放牧酪農の現場では、一頭ごとの健康状態を丁寧に見守る姿と、広い大地でのびのびと草を食む牛たちの姿が印象に残った (③)。



▲北海道取材班の訪問した場所 北海道東部を中心に、酪農の様子のほか自然環境などを取材した。



▲牛舎での搾乳風景 搾乳機で搾乳している様子。搾られた生乳は、密閉されたパイプラインを通して空気に触れることなく冷却貯蔵タンクに送られる。



▲放牧地で牧草を食べる牛たち 放牧地で牧草を食べている様子。取材班が訪問した昨年7月末は道東が記録的な猛暑に襲われており、早朝にもかかわらず牛陰に固まる牛たちも多く、暑さを避けているようだった。



④

▲雪印メグミルクなかしべつ工場内のクーラーステーションへ生乳が運び込まれる様子
写真手前にあるのが、北海道東部の酪農家から集められた生乳のタンクローリー。年間約30万トンの生乳がなかしべつ工場に集められる。



⑤

▲チーズ製造工場の様子 なかしべつ工場では「雪印北海道100 さけるチーズ」やプロセスチーズの原料となるナチュラルチーズ、ホエイパウダーを製造している。写真は原料ナチュラルチーズの製造工程。生乳に乳酸菌と乳を固める酵素を加えて脱水・加塩し、圧縮して大きな豆腐のように成型する。
※写真は企業秘密のため一部加工しています。



北海道の食品工業・酪農を支える 乳製品工場

生乳が向かう先、雪印メグミルクなかしべつ工場は乳製品工場であると同時に、北海道東部で生産された生乳を集めて分配する重要な集乳拠点でもある。取材当日も、各酪農家から搾られた生乳が次々と工場内のクーラーステーションへ運び込まれていた（④）。生乳はここから次の行き先へと振り分けられる。搬入量の約3分の2は道内の工場などに運ばれるほか、ほくれん丸で本州へも届けられる。残りの約3分の1は工場でのチーズ生産に使われており、日本の乳製品自給を支えている。工場で働く方々の姿も印象的だった。安心・安全で高品質な乳製品をつくるため、日々の点検作業や業務を一つひとつ丁寧にを行う姿勢が徹底されていた（⑤、⑥）。



⑥

▲チーズ製造工場の様子
成形したチーズのもとを箱の型に詰めたと、急速冷室で急速冷却し、熟成させる。製造工程の多くは機械化されているが、チェックや機械のメンテナンスには人の手が欠かせない。



北海道と本州を結ぶ ほくれん丸と流通調整

検査を終えた生乳を積んだミルクローリーは、釧路港へと向かう。港では、北海道の農畜産物を本州へ輸送する第二ほくれん丸にミルクローリーが次々と乗り込んでいた（⑦）。日々休むことなく搾られる生乳は、需要・供給ともに一年を通して変動するため、需給調整が難しい。ホクレンでは、廃棄を出さないよう日々の天候や需要に応じて供給先の細かな調整を行っているという。取材班は生乳の流通を追い、酪農家、乳業工場、農協、ホクレンなどそれぞれが役割を担いながら、地域一丸となって北海道の酪農を支えていることを実感した。



⑦

▲ミルクローリーが第二ほくれん丸へ乗り込む様子
第二ほくれん丸は、貨物を積んだ荷台やトラックごと輸送する大型船。釧路港～日立港間をほぼ毎日往復運航している。生乳タンクは回送時に丁寧に手洗浄され、衛生管理が徹底されている。

鎌倉武士のふたつの暮らし 『男衾三郎絵詞』のなかの都と東国

早稲田大学社会科学総合学院 教授 黒田 智

『男衾三郎絵詞』は、鎌倉武士の笠懸を描いた絵巻物として教科書になじみ深い。帝国書院『社会科 中学生の歴史』p.76～77では、武士の暮らしについて、中学生なりに読み取りを行い、まとめる活動が紹介されている。

坂東武蔵国にふたりの兄弟がいた。都の優雅な生活に憧れる兄・吉見二郎と、武芸一筋に励む武骨な弟・男衾三郎である。ふたりの鎌倉武士の暮らしと倫理観は、きわめて対照的である。描かれたふたつの暮らしの違いをみてみよう。

第一に門構えである。吉見二郎の屋形は築地塀に囲まれ、檜皮葺き屋根の門を入ると、藤のからまる松樹、庭先には桜や柳・梅が咲き乱れる。他方、男衾三郎の

屋形は板塀に囲まれ、弓矢を蓄えた藁葺きの倉を備える板葺きの簡素な門である。その門前では、「馬庭の末に生首絶やすな、切り懸けよ」と、従者たちが通りがかりの宗教者たちを引きずり込もうとする殺伐とした光景が広がる。第二に、二郎の屋形は春の景に彩られ、白い鳥や船がゆったりと浮かぶ池と庭園に、檜皮葺きの寝殿造風の邸内は黒格子の蔀と御簾におおわれ、琵琶や和琴などの管弦が置かれている。他方、三郎の屋形の門外に馬場が広がり、母屋の蔀も御簾も彩りはなく、そこここに大鎧や鎧櫃、胡録といった武具・甲冑が置かれている。第三に邸内の人びとに着目すると、二郎の屋形では歌会や囲碁に興じる男女、腹ばいで絵巻を広げる娘、笛や琵琶を演奏する人びとが描かれる。三郎の屋形の門外では、笠懸等の武芸に励み、中庭では弓張りや武具の繕いに余念がない。第四に描かれた兄弟の姿である。二郎は立烏帽子の真っ白い顔に小ぶりな目鼻をもち、胸紐のついた折り目のある大口の袖の直垂姿である。三郎はひしゃげた折り烏帽子姿で、褐色の顔に不揃いの眉と髭をたくわえ、装飾のない袖

二郎の妻 吉見二郎

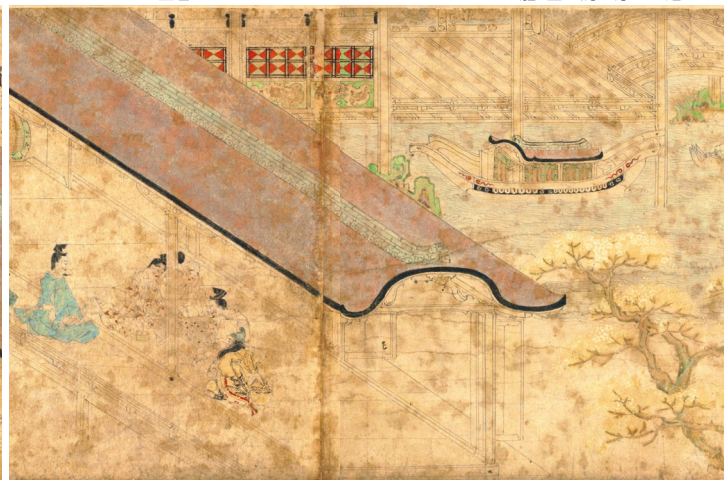
琵琶、和琴

琵琶、笛の演奏



囲碁

船、白い鳥が浮かぶ池



三郎の娘

三郎の妻 男衾三郎

板葺きの門

弓張り

武具の繕い



弓を蓄えた倉

細の直垂をラフに着こなして、左膝を立てて墓目^{ひきめ}の矢を手に妻を見つめる。第五に兄弟の妻と娘をみてみよう。貴族社会において長い黒髪は美女の第一要件であった。二郎が京から迎えた美しい妻は、長い直毛の黒髪をもち、引目鉤鼻^{かぎ}で下ぶくれの輪郭におちょぼ口である。他方、三郎が娶った「関東一の醜女^{しこめ}」は、縮れ髪にとがった顎、大きなぱっちり目と高い鼻をもち、口も大きい。その娘も天然パーマのぱっちり目で、当時「醜女」とされた素質を遺憾なく受け継いでしまっている。

都の公家に憧れる優雅な暮らしと東国武士たちの武骨な暮らし。描かれたふたつの暮らしは、鎌倉時代の相異なる価値観をもつふたつの文化を浮かび上がらせている。

こののち大番役のために上洛する途次^{とおとうみたち}の遠江高師山で、二郎は山賊に襲われて落命する。従者が二郎の死を知らせに帰路につくなか、駿河清見関^{するがきよみがせき}では、遠く海上に現われた観音菩薩^{びくごう}の白毫から発した光明が討ち死にした二郎の首を照らした。しかし、三郎は兄から託

された、荘園の一部と家を妻子に譲り渡したいという遺言を無視して領地と屋形を奪い、三郎の妻は二郎の妻子を下女として働かせて継子^{ままこ}いじめをする。いわゆる継子いじめ譚^{たん}のプロットから類推すれば、欠損した後日譚は二郎の妻子が観音の靈験によって救済されるハッピーエンドが予想される。

この物語は、都の公家文化に軍配を上げたことになるだろう。都びとたちの東国への侮蔑的まなざしは、「歌さへぞひなびたりける」(『伊勢物語』)と嘲笑し、「あやう荒らかに田舎びたる心」(『源氏物語』)と軽んじる。しかし他方で、観音が二郎の娘を哀れみ、二郎の救済を約束した清見関は、都と東国という東西文化の交差点であった。関所の東では、巴御前や板額御前^{ともえ はんがく}のごとき「猛き心」をもつ大力女の武勇が求められた(『吾妻鏡』)。東国社会では、彼女たちが「壮力の男子を生み、朝廷を護り、武家を扶け」(同前)る者として賞賛される異質の文化を確かに脈々と育みつづけていたのである。

花が咲く庭

歌会

築地塀に檜皮葺きの屋根の門



従者が宗教者らに襲いかかる

馬場

笠懸



物乞い 『男衾三郎絵詞』(『男衾三郎絵巻』)(重要文化財、東京国立博物館所蔵) 部分 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

キャッチ! 日本と世界の動き

Information

日本 ▶ 鉄道路線廃止

- 2026 年 4 月 1 日、JR 北海道、留萌本線「深川」駅（北海道深川市）～「石狩沼田」駅（同沼田町）、延長 14.4km が廃止された。

日本 ▶ 鉄道新駅開業

- 2026 年 3 月 14 日、JR 西日本、山陽本線に新駅「てがら手柄山平和公園」駅（兵庫県姫路市）が開業した。
- 2026 年 3 月 14 日、ハピラインふくにに新駅「しきぶ」駅（福井県越前市）が開業した。

日本 ▶ 鉄道駅廃止

- 2026 年 3 月 14 日、JR 北海道、函館本線の「二股」駅（北海道長万部町）、「仁山」駅（同七飯町）が廃止された。

日本 ▶ 道路開通

- 2026 年 2 月 28 日、日高自動車道の「日高厚賀 IC」（北海道日高町）～「新冠 IC」（同新冠町）間約 9.1km が開通した。
- 2026 年 3 月 22 日、国道 40 号「音中道路」の「音威子府 IC」（北海道音威子府村）～「中川 IC」（同中川町）間約 19.0km が開通した。
- 2026 年 3 月 28 日、山陰道「三隅・益田道路」の「石見三隅 IC」（島根県浜田市）～「遠田 IC」（同益田市）間約 15.2km が開通した。

日本 ▶ ユネスコ無形文化遺産追加

- ユネスコ（国連教育科学文化機関）は 2025 年 12 月 11 日、無形文化遺産の「山・鉾・屋台行事」に「常陸大津の御船祭」（茨城県）、「村上祭の屋台行事」（新潟県）、「放生津八幡宮祭の曳山・築山行事」（ほうしんづ はちまんぐうさい富山県）、「大津祭の曳山行事」（滋賀県）の 4 件、「和紙」に「越前鳥の子紙」（福井県）、「伝統建築工匠の技」に「手織中継表製作」を追加した。

世界 ▶ FTA（自由貿易協定）の締結

- 欧州連合（EU）とメルコスール（南米南部共同市場）は 2026 年 1 月 17 日、自由貿易協定（FTA）を締結した。

これにより南米側の対象国はブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイの 4 カ国となった。

- 欧州連合（EU）とインドは 2026 年 1 月 27 日、自由貿易協定（FTA）を締結した。

Topics

日本 ▶ | 農家 5年で34万人減



産業 2025.11.29 中日新聞朝刊（共同通信配信）より

農林水産省が 28 日発表した 2025 年の「農林業センサス」（速報値）によると、自営農業を主な仕事とする「基幹的農業従事者」は 102 万 1 千人で、20 年の前回調査と比べ 25.1%、34 万 2 千人減った。減少率は比較可能な 1985 年以降で過去最大。燃料や肥料など資材価格の高騰や猛暑を背景に生産現場の環境は厳しくなっており、高齢者を中心に離農や廃業が加速したことが要因だとしている。（中略）平均年齢は 0.2 歳下がり、67.6 歳だった。平均年齢が下がるのは比較可能な 95 年以降で初めて。従事者数の減少は全ての年代で進むが、高齢者の離農が比較的多く、65 歳以上の構成割合は 0.1 ポイント減り、69.5%となった。年代別では 70 代が最も多く全体の 4 割弱を占めた。（後略）

世界 ▶ 都市圏人口 ジャカルタ首位



人口 2025.12.08 朝日新聞朝刊より

国連が世界で最も人口の多い都市圏がインドネシアのジャカルタ（約 4190 万人）だとする報告書を発表した。バングラデシュの首都ダッカ（約 3660 万人）、東京（約 3340 万人）の各都市圏が続いた。11 月 18 日に発表された報告書によると、上位 10 位のうち九つがアジアだった。ダッカは 2050 年までに世界最大の都市圏になると予測している。東京は 50 年には 7 位に後退すると指摘。（中略）インドネシアの総人口は約 2 億 8 千万人で世界第 4 位。1 万を超える島々で構成され、東西の長さは約 5100 キロに達する群島国家だが、ジャカルタのあるジャワ島に人口の半数強が集中している。政府は人口集中の是正などを理由に、カリマンタン島東部ヌサンタラに 45 年までに首都を移転する計画を進めている。

日本 ▶ 20代外国人比率9.5%



社会 2026.1.4 沖縄タイムス朝刊（共同通信配信）より

日本国内の 20 代人口に占める外国人住民の比率が

2015 年の 4.1%から急速に上昇し、25 年には 9.5%に達したことが 3 日分かった。少子化で日本人の若年層が大幅に減少する中、外国人は労働だけでなく社会保障の支え手として存在感が高まっている。20 代の外国人住民数は 10 年間で倍増した。海外人材受け入れ制度「育成就労」の新設などを背景に、さらに増える公算が大きい。地域社会定着に向け、日本語学習や専門技能習得への支援が課題となる。(中略) 政府は昨年 12 月、27 年度開始の育成就労に関し、2 年間で約 42 万 6 千人を上限に受け入れる案を有識者会議に提示した。労働力不足を外国人で補う流れが強まっている。(後略)

日本 ▶ 抹茶 世界でアツい



産業 2026.2.3 読売新聞朝刊より

世界的に抹茶の需要が高まっている。財務省が先月 29 日に発表した貿易統計によると、2025 年の抹茶を含む緑茶の輸出量が 1 万トンを超え、輸出額は過去最高となった。政府が 30 年に農林水産物・食品の輸出額を 5 兆円とする目標を掲げる中、成長エンジンとして緑茶に期待がかかる一方、国内市場での価格高騰も懸念される。抹茶を含む緑茶の輸出量は前年比約 3800 トン増の 1 万 2612 トンで、10 年間で 3 倍となった。業界団体によると、1 万トンを超えるのは約 70 年ぶり。輸出額は約 721 億円で、過去最高だった 24 年の 364 億円から倍増した。国・地域別では、米国が 293 億円で最も多く、全体の 4 割を占めた。欧州や東南アジアでも需要が伸びている。(後略)

日本 ▶ 文化語り手 海外へ派遣



民族文化 2026.2.21 読売新聞夕刊より

外務省は、伝統芸能やアニメなど日本文化の魅力や歴史を伝える「語り手」を海外に派遣する取り組みを始めた。中国が外国での文化発信を通じて自国の影響力を拡大していることを念頭に、ソフトパワーを活用して日本への理解者を増やす狙いがある。語り手は、茶道家や三味線奏者など伝統芸能の担い手のほか、世界で人気の漫画やアニメ、映画といったポップカルチャーの関係者が務める。派遣は 1 月 17 日にボスニア・ヘルツェゴビナで行われた津軽三味線の講演からスタートし、2 月にはモロッコで漫画、チュニジアで武道に関する講演も行われた。3 月末までにシンガポールやオーストラリア、ガーナなど計 20 か国以上に派遣する予定で、和太鼓や食文化、喫茶店などがテーマとなる方向だ。(後略)

日本 ▶ 高校生 ネット 6 時間 44 分



教育 2026.2.27 朝日新聞朝刊より

高校生がインターネットを利用する時間は平日平均で 6 時間 44 分と過去最長だった。前年より 25 分増えた。また、高校生の半数弱が生成 AI(人工知能)を使っていることもわかった。(中略) 小学生(10 歳以上)は 3 時間 54 分、中学生は 5 時間 24 分で、いずれも過去最長だった。目的別では、「趣味・娯楽」が 3 時間 1 分で、「勉強・学習・知育」は 1 時間 6 分。「保護者や友人らとのコミュニケーション」は 58 分だった。「ChatGPT(チャット GPT)、Copilot(コパイロット)、Gemini(ジェミニ)などの生成 AI」についての利用状況を初めて質問に加えたところ、30%が利用していると回答した。内訳は小学生が 9%、中学生が 31%、高校生が 46%だった。(後略)

日本 ▶ タンチョウ「絶滅危惧」外れる



環境 2026.3.17 読売新聞夕刊より

環境省は 17 日、絶滅の恐れがある生物をまとめた「レッドリスト」の改訂版を公表した。日本固有種の「ニホンイシガメ」などが絶滅危惧種に加わった一方、国の特別天然記念物のタンチョウは個体数が回復し、絶滅危惧種から外された。(中略) 本州や四国・九州の水辺などに暮らすニホンイシガメは、生息環境の減少やペット取引が目的の乱獲などで、存続基盤が弱い「準絶滅危惧」から、絶滅の危機が増大している 2 類に引き上げられた。一方、北海道・釧路湿原などを繁殖地とするタンチョウは 2 類から準絶滅危惧に引き下げられた。1952 年時点で 33 羽まで減ったが、冬のエサやりや繁殖地の保全活動などの取り組みが功を奏し、2025 年 1 月の調査では 1927 羽が確認されるまで回復した。(後略)

お詫びと訂正のお知らせ

弊社発行物におきまして、記載に誤りがございました。次のとおり訂正いたします。ご迷惑をおかけいたしましたこと、謹んでお詫び申し上げます。

※帝国書院 Web サイトトップページ

「教科書等の訂正・更新のご案内」もご覧ください。

社会科中学生の地理 指導書 教科書解説編〔地理 046-72 準拠〕

箇所	もとの記述	訂正後の記述
p.172 授業のポイント(板書例)	全国有数の温泉地…別府、湯布院、黒川	全国有数の温泉地…別府、 <u>由布院</u> 、黒川

社会科中学生の歴史 指導書 教科書解説編〔歴史 046-72 準拠〕

箇所	もとの記述	訂正後の記述
p.239 人物コラム「原敬」	<u>宮城県</u> に生まれる。	<u>岩手県</u> に生まれる。

アプリ「帝国書院」のご案内



帝国書院

先生限定

要Webサイト会員登録

無料アプリ



すきま時間にさっと読める

どうすれば、先生方にもっと手軽にわたしたちが教科書・地図帳に込めた思いや工夫をお届けできるだろう…そんな思いから生まれたアプリです。

冊子「中学校社会科のしおり」がご覧いただけるほか、地理・歴史・公民での地図帳活用方法がわかる「わたしの地図活用」や「授業のツボ！地理・歴史・公民」などのコンテンツがご覧いただけます。



通勤時間に



ひと息ついたときに

先生方の役に立つ



会員登録はこちらから



アプリダウンロードはこちらから

App Store



Google Play



アプリをご利用いただく前に、帝国書院Webサイトに会員登録をさせていただく必要があります。すでに帝国書院Webサイトにご登録いただいている方は、同じアドレスとパスワードを入力してログイン、もしくはSSOにてサインインいただけます。会員登録がまだの方は、アプリご利用前に右上のQRコードから会員登録をお願いいたします。

- ※1 〈QRコード使用上の注意〉QRコードを読み取って表示されたサイトにアクセスした際には、別途通信料がかかる場合があります。リンクは予告なく変更・廃止することがあります。
- ※2 〈本誌掲載の他社商標について〉
- ・QRコードは、株式会社デンソーウェーブの商標または登録商標です。
 - ・App Storeは、Apple Inc.のサービスマークです。
 - ・Google Play、Google ドキュメント、Google マップは、Google LLC の商標または登録商標です。
 - ・ロイノートは、株式会社LoiLoの商標または登録商標です。
 - ・その他の会社名および製品名・サービス名・ロゴマークは各社の商号、商標または登録商標です。

（イラスト：香川 元太郎、濱 美季、まつむらあきひろ、PIXTA）

中学校社会科のしおり

2026年度後期号 No.63

2026年8月26日発行 ©Teikoku-Shoin Co.,Ltd.2026

発行所 東京都千代田区神田神保町3-29(〒101-0051)

株式会社 帝国書院

発行人 守屋 智央

電話 03-3262-4795(代)

<https://www.teikokushoin.co.jp/>

読者アンケート

より先生方のお役に立てる内容をお届けするため、ぜひアンケートでご意見・ご感想をお寄せください。右のQRコード、または下記からアクセスしてご回答いただけますと幸いです。



〈アンケートフォーム〉

https://www.l6.webcas.net/form/pub/teikokushoin/shiori_reader

教授用資料